

渡辺啓助探偵小説選Ⅰ
目次

屍版	1
幽霊荘に来た女	9
死の日曜日	17
亡霊の情熱	33
薔薇悪魔の話	47
三吉の食欲	56
幽霊の歯形	63
蛍小僧	83
センチメンタルな蝦蟇 ^{がま}	101
ヴィナスの閨 ^{ねや}	112
白薔薇教会	128
落書 ^{らくがき} する妻	145
壁の中の女	149
獣医学校風俗	164

謎の金塊	172
雪の夜の事件	186
短剣	197
盲目人魚	211
青春探偵	
頸飾り	251
薔薇と蜘蛛	265
翡翠の娘	279
開かずの扉	293
長崎物語	306
夢みる夫人	320
ケイスケとオメガ倶楽部のこと	333
渡辺東	
【編者解題】 浜田雄介	335

凡例

- 一、「仮名づかい」は、「現代仮名遣い」(昭和六一年七月一日内閣告示第一号)にあらためた。
- 一、漢字の表記については、原則として「常用漢字表」に従って底本の表記をあらため、表外漢字は、底本の表記を尊重した。ただし人名漢字については適宜慣例に従った。
- 一、難読漢字については、現代仮名遣いでルビを付した。
- 一、極端な当て字と思われるもの及び指示語、副詞、接続詞等は適宜仮名に改めた。
- 一、あきらかな誤植は訂正した。
- 一、今日の人権意識に照らして不当・不適切と思われる語句や表現がみられる箇所もあるが、時代的背景と作品の価値に鑑み、修正・削除はおこなわなかった。
- 一、作品標題は、底本の仮名づかいを尊重した。漢字については、常用漢字表にある漢字は同表に従って字体をあらためたが、それ以外の漢字は底本の字体のままとした。

屍 版

午前の強い陽ざしの当る窓際近く、真木は寢台ベッドに埋ま
 って、皮膚一面にしみわたる心よい暖かさを感じながら、
 懶惰らんだに瞼を閉じていた。——勤人の多いこの郊外の安ア
 パートの昼間は、休校になった校舎のようにしいんとし
 て、ペンキの罅ひびれて剥げ落ちる寂しさだけが残っていた。
 死んだ妻のことも、間もなくその後を追うに到った嬰兒みどりご
 のことも、もはや、その事件の鮮明な細部ディテールを失って、一
 様に単色の寂寥の中に濾過されてしまつて、ただ虚無感
 だけが一面にひろがって、真木の心の活潑な機能を全く
 覆いつくしているのだつた。

異常産に依る妻の突然の死——妻の声とも思えぬあの
 動物的な呻きが、耳の底にいつまでも幻聴のように残つ

ていた。不思議にも、胎児だけは、それを望まなかつた
 にも拘らず生きて生まれたのである。それは亡妻なきつまと瓜二
 つと云いたいほどよく似た男の児であつた。その嬰兒を
 見ると、父親としての争われない本能が猛然と目ざめて
 きて、どうしても満足に育て上げねばならぬ願に燃え
 た。それは一種悲壮なものであつた。妻が生きていた当
 時は、むしろ甚だ家庭的でない学究肌の彼ではあつたけ
 れど、この妻の忘れ形見を育てあげようとする上におい
 て、彼ほど綿密に、こまめに働いた父親はかつて無かつ
 たと云つていい。ところが、人工營養児としてのハンデ
 イキヤップを、父親の用意周到な科学的な思慮をもつて
 充分取り除く決意でのぞんだにも拘らず、嬰兒は僅か一
 月ばかりで、死んでしまつた。それは、落胆と云うよう
 な生やさしい言葉では云い現わすことの不可能な、つま
 り、もっと激しい物理的な衝撃を彼の全身に与えた。彼
 は、アパートの扉に錠を下ろして、死児を抱いたまま、
 二日二晩、ベッドの上に睡り続けた。おそらく哀傷から
 ではなしに、全く無感情な、全身的な疲労から熟睡を続
 けたのであろう。死児の氷塊のような冷たさが、すでに
 分解を始めたらしい悪臭と共に、彼自身の皮膚に浸み込
 んで、彼は漸く目を醒ました。哀愁と云うような感情
 の動き始めたのは、それからであつたらしい。

彼の目覚めたのは、大方草木も眠る丑満頃であったのだらうか。コトリとも音もしない深々とした夜の重味の中に、彼はむくりとベッドから起き上ったのであった。窓外には月の光とて無く、ただ眉を圧するほどの濃い闇が押し迫っていた。彼は何故か、明々昧々たる電燈を点ける気がしなかつた。古びた燭台を探し出して蠟燭を点じた。このように古めかしい宗教的情緒が湧いてきたことから考えて彼は今や、よほど冷静になつてきたのであらう。彼は蠟燭の月暈めいた光の下に、今更のように死児の顔をしみじみ見守つたが、外面的には、まだそれほど傷んでいなかつた。乳幼児の死顔は、大人の場合と違って、おそらく混濁した人生の塵埃を全く吸つていないためであらうか、死相らしくもなく不思議に清麗なものであった。カリカリ歯音を立てて喰べてしまいたいような食欲を感ずるほど美しいものであった。彼は、それがママア人形のように抱き起すと、ママアと含み声で機械的に鳴くようにさえ思われるほど、生ものという感じがしなかつた。彼はこの神秘的な玩具を抱いて、部屋中を半ば無意識にコトリコトリ歩き始めた。この数週間櫛一つ入れないままの頭髮は伸びに伸びて、浪花節語りの総髪のように、襟元まで汚ならしく覆うていた。その異様な姿で部屋中をぐるぐる廻っているのが、蠟燭の炎を浴

びて壁に映し出されると、まことに救い難い煩惱の鬼のごとく、浅間しくも、みじめにも見えるのであった。彼はぐるぐる廻っているうちに、死児そのものが、この父親の動物的な哀嗷を、恬として知らざるもののごとく、あくまでも清麗で冷やかで、父親の到達し得ない涅槃の世界にすでに悟入しているかの如くに思われた。彼はかつて大和の古寺で菩薩像を見たことがあるが、そのほのぼのとした美しさと冷たさが、死児の上にも浮び出ているのを見た。何かしら、光輪めいた眩ゆきものが死児の頭上に揺曳しているのを見た。哀しき父の顛倒した錯覚を啜わば啜え——蠟燭を吹き消てもなおその典雅な光の輪はチロチロと燐の如くに闇の中で燃えていた。彼は再び灯を点じてこの死児の肉体が、腐肉と化する前に、あまりにも天的なその美しさと哀憐とをこの世にひきとめておこうとして、一つの仕事にとりかかった。彼には絵心もなく、デスマスクの取り方も知らず、写真機も持ち合わせていなかつた。この場合、彼の心に靈感の如くに浮び上った思いつきは、この死児の拓本を取っておこうということであつた。彼は、或る文科大学の歴史学の教師だった関係から、拓本を取っておかねばならぬ機会がかなり多かつた。古代民族の土器の紋様から、磚瓦、刀剣、鐘銘、墓碑銘といった類の拓本、俗に石刷りと云

うのを、かなりの数に渡つてとつた経験を持つていた。魚拓、即ち鮮魚類の拓本を取つて風流とする人のあることも聞いているが、彼自身は、まだ生物の拓本をとる趣味も経験も無かつた。しかし、今や異常な熱心と期待を持つて、死児の肉体の上に白紙を広げて水引きをした。鳩居堂の釣鐘墨を溶いた墨汁を印肉として、パンヤを絹布けんぷで包んで作つたタンポにこれをつけて、生乾きになつてピッタリ皮膚に貼りついてる白紙の上から、ペタペタと押しつけると、軀からだの形なりに、皮膚の肌理きめが精密に黒々と紙面に浮び出てくるのであつた。勿論、タンポを押しつけるコツはかなり技術上の手加減を要するのであつたが、とにかく、夜のほのぼのと明け初める頃、死児の拓本もどうやら出来上つた。これは、彼の最初の試みとしては、不思議なまでに出来上つた。死児の面影を、拓本独特な性質において、充分伝えていた。簡単に云えば、指頭に印肉をつけて指紋を印すると同じ原理を全身に及ぼして作り上げた拓本のことだから、雪白な死児の皮膚が、無数に繊細な条紋として紙面に表われてきて、見るからに黒々とグロテスクを極めた、平べったい異形な姿を紙上に印するのであるが、それが却つて、千萬無量の感情を含蓄し、しかもこれを一気に圧縮した冷たさと神々しさとがしんしんとして発散するものであつ

た。魂魄あるが如く無きが如く、一枚の紙つべらに写しとられた死児の姿が、折からの黎明の隙間風に煽られて、二三度はためいた時には、懐かしさとも有難さともつかぬ感情が彼の鼻梁を撥はぐつて、霊験あらたかな神仏の前にひれ伏した時の如く、思わず大粒の涙がポロリとほろり落ちたのである。

しかし、思えば、それも一時の狂気の沙汰であつたのであろうか、何日か経つと、そうしたヴィヴッドな感慨は次第に伴わなくなつてきた。——ただ一様に物憂い虚無感だけが彼の燃焼しきつた生活の残滓としてあるに過ぎなかつた。空中分解した飛行機のごとくすべては飛び去つてしまつて、ただ真白な空間そのもののような無感情があるばかりであつた。

もしこの時、一人の女性が、忽然として、現われなかつたならば、彼のこうした状態もなお暫くは続いたかも知れなかつたが、幸か不幸か、月輪弓子つきのおなる新野蛮座ネオバリエの歌劇女優が、突風のように訪れたのであつた。

ハテ、月輪弓子？——彼にはこの少女歌劇のピカ一を知らなかつたほど、そういう世界についての知識に欠けていた。したがつて、彼がかつてその苦学時代の内職に女学校の教師であつた頃の教え見であると、彼女自身から云い出されても、暫くは、この風変りな美しい訪客

をただまじまじと見据えるにすぎなかった。彼女は、その期待に反して、初手からこの病み呆けた野良猫のような彼の凝視をあびたのであるが、月輪のように無邪気な女というものは割合に無神経でもあるが故に、彼の凝視をむしろ物珍しげにキョトンとして見返えたのである。よく見ると、彼の凝視というものも、どこか視光がボヤツツとしていて、彼女が舞台や、街上でファンたちから浴びせられる物欲しげな注視に較べると、むしろ甚だ散漫で柔やかな、それだけ鋭い意力に欠けている性質のものであった。——（先生は、きつと甚く病気に罹っていらつしやるに違いない）彼女はそう思わざるを得なかった。彼女は、その女学校時代にこの無愛想な、そのくせどこか理智的な温情と鋭い新鮮さをもっている真木を数多くの教師の中で、一番崇拜していたのだ。女学生の信仰や崇拜や憧憬は、その中核においてはおそらくつねに恋愛の萌芽と共存する。したがってまたつねに詩的でもあった。月輪弓子の心にはこの真木駿先生がつねに香ぐわしいシルエツトを残していたのだ。若い大学教授が妻子を殆んど一緒に失うて神経耗弱の状態にあることを、何かの雑誌のゴシップで彼女は読んだのと、しかもそれが旧師真木駿その人であることを全く同時に知ったのであった。——彼女は郊外のややっこしい地理にも辟易する

こともなく、ついに真木のアパートをさぐりあてたのであるが——尋ねるその人は、もはや昔日の面影を大部分喪失した姿で発見されたのである。

「僕が——ふん、僕はオプロモフのように退屈だね。

——ただこうして、窓ぎわの寝台に寝そべってひがな一日ち、ねて暮すのがいい——いいも悪いもない——そうするより外、手がないんだよ」洵に虚ろな笑いだった。

「いまの中だけよ先生——たんと悲しんだがいいわ。

わたし、やつぱり先生が快復なさるものと信じているわ。先生は、たしか秋田県生れでしょう。神経が細かくって鋭敏でも性根の奥深いところには、やつぱり東北人特有のガンバリの強さがあると思っているわ」そう云う彼女の小麦色の頬には涙の粒がキラキラと輝き始めていた。

「ほんと云えば、先生は早くこの白っちゃけた墓地みたいなの、アパートから引越すことですわ、もつと明快な住宅をわたし一生懸命探してみるわ」

「うん——ありがとう、けれども、まあいまのところ、これで別に不満がないよ、極端に厭人的傾向があるし、まあ結局墓場みたいところが俺の柄だね」こうして彼女はこの旧師を救う一切の手段を失った形であった。けれども彼女は、これで旧師救済の念願を放擲したわけはなかった。

この女優が帰ってしまつてから、彼は、またもとのように瞳を閉じて全く惰眠の中に落ち込んだ。——しかし再び目ざめた時、彼は何んとも知れないすがすがしくも艶かしい香が亡妻と亡児のまだ失せぬ死臭の記憶とまじりあつてゐることを意識した。多分これは月輪弓子の移り香である——現世的なするどいその香りに彼は思わず小鼻をひくひくさせたのである。けれど、彼にはそれはむしろ妙に馴染まない印象しか与えなかつた。いわば彼自身踳踳たる死霊にひとしい者であるから、静謐な墓場の空気を、こうした現世的に華麗な生物によつて混濁されることを反撥せずにはいられたのであろう。

ところが——更に、もう一つの現世的の油っこい声によつて彼は搔きみだされた。扉があいて、こういう場合まるで礼儀を知らないこのアパートの管理人の息子である不良少年黒田銀之助が、非常に生々とした目つきで、ノックもせずに入つてきた。彼の性来遅鈍な目つきが、かくも獣的な輝きを見せるのは、殆んど例外なしに、彼が何か好色的な興味を持った場合に限られていた。

「先生——来たんでしよう、来たんでしよう、月輪が——ニッポンのポアイエが、うまくやつてゐるな、おごらせるぜ。先生も潜行的に相当たのしんでるんだね。人は見かけによらないとは、先生のこつたあ」

妙に息をはずませる口調で、狂燥的に云うのである。相手の心情を忖度することを知らないこの少年の、無神経にかかつては誰にしても明白に敗北するのである。結局黙つてゐるより手段が無かつた。

「月輪と親戚かい、友達かい、それとも恋人かい、——アベックでハイキングに出掛ける相談に来たんじゃない？——やけちゃうな。今度来たら、サインを頼んでいいでしょう」

このふてぶてしい、ませた能弁は蠅のように真木のうらぶれた神経をいたぶるのである。だから真木もとうとう爆発した。

「サイン？——サインがほしけりや何枚でも貰つてやる——から、きょうのところはさっさと引き取つてくれよ。俺は病人だからな、ペラボーめ、サインつて、つまりインキじゃねえか、しみつたれなことを云わないで、月輪の拓本でもくれつて云うもんだ。厚かましいくせに、云うことはケチだぞ」彼にしてもこんなことを云うつもりはなかつたが、苛立った昂奮のあまり、ついこんな心にもないことをすべらしてしまつたのだが——その瞬間、月輪のすんなりとバランスのとれた、たとえば夢殿の救世観世音像にも比すべき、たぐいまれな容姿の美しさが、ちらりと閃光のように脳裡をかすめて、ほん

とうに拓本にしたい清新な欲望がふつと起った。

「拓本——そんなのがあるかい、ああ、知ってる、先生の坊ちゃんの屍体をうつしたのかい、そのベッドの枕元にかけてある額縁のがその拓本って云うのだろう——嫌だよ先生艶消しじゃないか。色は黒うても南洋じゃ美人ってことにするかな、やっぱりプロマイドにサインしてもらおう、しみつたれでもなんでも、彼女のインキのにおいは——」

「うるさい——出て行け」

彼は病犬わづかいぬいのように目を剥いて、この底知れない好色少年に飛びかかる氣勢を示したので、さすがの銀之助もひよこりとドアのすきまから消えてしまった。その日はそれですんだけれども、この少年の執拗さはその位のことでは屈しなかった。それから引続いて毎日毎夜のごとく彼に、月輪のサイン入りのプロマイドをせがむのである。彼は、夢うつつにこの少年の爬虫類のようにぬらぬらした、つねに同じ調子の不潔の饒舌が、まとまわりついで離れなかった。

彼は亡妻、亡児の霊前にそなうべき香りの高い線香を求むべく外に出たついで、ふと思いついて彼女の出演している劇場に車を寄せることにした。痩せさらばえて夢遊病者のように蹠蹠として這入ってきた彼を見て劇場の

案内人達は私語したほどであった。

彼は月輪の舞台を一幕だけ見た。ポアイエ張りの歌声も瑰麗かたれいにして潑刺たる舞踊も美しいには美しかったけれど、それは結局あまりにも生々しくって彼がかつて死児の上に黎明の仄明りで見た幻怪無比な天上的な美しさに比すべくもないと思った。ここで演ぜらるるすべての美しさと階調はそれと一つになる神経を彼はもはや失っているかのように思われた。月輪の訴えるような彼へのまなざしも彼には何ら感応する力もなく、ただ例の不良少年撃退策として彼女のサイン入りのプロマイドを彼女の情なさそうな苦笑と共に受取つたにすぎなかった。

銀之助は月輪のサインに満足して、もはや真木を悩ますことが失くなった。——したがって昂奮も感激もない懶惰倦怠の時間が、青白く真木の上を音も立てずに流れて行くだけだった——真木は縊死することを考えた。それは非常に楽しめるべきものとして彼の脳裡に映った。

——しかし真木がそれを決行しようとする一歩手前で月輪弓子の失踪が伝えられた。引続いてその変死が。——

新聞の大々的に伝えるところを要約するところである。彼女はファンと考えられる者と共に——こういうことはむしろ日頃の彼女らしからぬことであるが——ハイキングに榛名はるなに出掛けた。その相手はいまだ判明されていない

いが、彼女の絞殺屍体だけが榛名湖畔の草叢の中に遺棄されてあった。裸体であったこと、更に全身にわたつて灰ほのかに植物油の匂がしていること等であった。真木は月輪の記事ののっている新聞紙を殆どアパートの管理人に読んでかされた。人生の煩わしさと没交渉になつたはずの彼がまたもや、こうして引もどされた形であつたがさすがにギョツとしたらしかつた。彼は彼女の死因を一応たしかめたい欲望が起つた。——これはまったく彼にとつて久方ぶりに欲望と名づくべき新鮮な意志の動きであつた。

「ふん、——あいつやつたな、——これはてつきり銀之助の仕事にちがいない」真木は、彼女の全身に植物油の匂いのしたということから推して銀之助が月輪弓子を殺して、拓本をとつたという結論に到達した。拓本用の釣鐘墨は種油で溶かして作るものであり、その移り香が死体の皮膚に浸み込んだものと考えられた。果して、彼の想像のごとく犯人は銀之助であり、まもなく捕縛された。

犯人の自供によると、月輪が悲愁に閉ざされている真木を、ハイキングに誘うべく彼のアパートに訪れて来たが、昏々とねむりつづけているらしく起きる様子も無かつたので、彼女は手紙をかいてそれを銀之助に託して、

真木に手渡してくれることを頼んだ。——ところが銀之助は、それを開封して、彼女の計画を知ると、真木駿がすでに榛名の湖畔ホテルに先発していると偽りを伝えて、彼女を榛名につれ込んだのであつた。彼女の屍体の拓本は、むしろ甚だ醜怪なものであつた、といつていい、いやそれが却つて魅力であつた。

真木はその拓本によつて、彼女の舞台のライトを浴びて輝いたどの姿態よりも一層あざやかに、彼女の本然の美しさを掴みえたと信じた。殊にこんもりと盛上つた乳房のふくやかな隆起や、腹部から腰部へ流れ落ちる曲線のすばらしさを、永らく拓本をとりあつかつた経験——殊に愛児の拓本をとつたその経験から生み出された鋭い直感から充分生々しく想起することが出来た。

それはしかも、かの死児の場合とは違つて微塵も抹香くさい幻夢ではなく、おのが肌と彼女の肌とピッタリ触れ合せて、はじめて感じられるところのエロチックな現実性をもつて押し迫ってくるものがあつた。彼はじつと彼女の拓本をおのが肌に抱きしめて、不思議な歓喜おののいた。いままで彼が彼女の現身うまと額をつきあわせておりながら、感じ得なかつた頼もしさがひとつひとつほれぼれと甦り、彼と死神との緊縛を断ち切つて、若々しい性慾を全身に湧き立たせるものであつた。それは何か疼

くように荒つばい生活力ウツクイカクタイの衝動であつた。

彼はバスルームに飛び込んで、久しくあたらなかつた無性鬚を剃り落して、しげしげと鏡におのれの顔をうつして見た。蒼白に憔悴していたとは云え、その美しい稜角の中にはどこかに逞しい若さが潜んでいる顔つきだつた。彼は湯の中にひたりながら、まるで精悍な漁色家のように、活力を附与してくれた月輪弓子の恋情へ、そして不思議な魅力を漲らして、黒々と汚れている拓本へ、おのずから合掌する気持になつた。

幽霊荘に来た女

1

その別荘は、もと幽閑荘と云つていたのであるが、あの事件があつて以来、いつのまにか皆んなが、幽霊荘と呼ぶようになってしまった。久しく住い手もなく、貸別荘としても売家としても、すっかり敬遠されて、潮風に打ち曝されたままになっていたのを、二年ほど前から、黒木青蛾と云う小説家が借りて住んでいるとのことであった。

この海岸町の三等郵便局で、午過ぎの手隙きの時間に、局員たちの間で、ひとしきりこの幽霊荘について雑談の花が咲いたのであつたが、ハッキリした正体なるものが、なかなかわかりかねた。

「何んでも、黒木青蛾つてのは、怪談じみた薄っ気味

悪い小説ばかり書いてるって云うじゃないかね」そんなことにたいして興味も無さそうな局長代理の村井までが口を出した。

「黒木青蛾の小説なら、一二三つ読んだことがありますかね」つて、文学好きの若い局員の細川が云い出した。「その中に『幽霊荘綺談』つて云うのがあるんですがね。あること無いこと取りまぜての話ですが、当時の事件が割合に濃厚に出ているし、とにかく『幽霊荘』なるものの片鱗を伺うに足るものらしいですね」と、いかに、その方面の通らしく説明した。

「その荒筋を云うとざっとこんな風なんです。一体、この幽霊荘と云うのは、もとこの町出身の杉浦氏のものであつたが、杉浦氏が落目になってからユーラシヤ商事会社の東京支店長浜六郎の手に移つた。ところがこの少壮企業家は、いろんな複雑した原因から、かねがね魅力を感じていた自分の会社の美人タイピストを道づれに、飛行機から飛び下りの無理心中をやつたんです。タイピストだけは、奇蹟的に助かつたんです。しかし両眼は完全に失明してしまつたので、会社の者が不憫がつて、六郎夫人には秘して、コッソリこの別荘につれて来て、自分の間住まわせることにしたのです。このタイピストにしてみれば、浜六郎なんか別に上役として以外の感情を

もっていたわけではなし、単に捲き添えを喰っただけのことで、実に諦めきれない災難だったわけですが、温順な女だけに、まるで影のようにヒツソリと、語るべき言葉もなく住み暮らしていたのです。ところが、浜六郎夫人が、いつのまにか、彼女の在所ありかを嗅ぎ出して、ある日、コソソリやって来た。六郎夫人にしてみれば、この女のために、六郎が死んだものと一途に思い込んでいたので、復讐する気になったらしい。この盲目めくらの女を幽閑荘の奥深い一室に封じ込んで堅く錠をおろすと、自分はずっと東京の本邸に帰ってしまった。別荘には召使と云つても耳の遠い婆さん一人つきりだったので、このことは誰にも気づかれずじまつたのです。その不幸なタイプストは勿論監禁されたまま死んでしまった。が、その後、しばしば変なことが起つたのです——たとえば琥珀色に月が輝き、空気がしんと水のように澄んだ晩など、監禁された部屋とおぼしき辺から美しいソプラノの、しかしどこか鬼哭おにうた啾々たる感じの歌声が流れて来る。都塵を避けてこの土地へやって来た文学者某が、その歌声を夕涼みの砂丘の上で聞いて、空屋あきやになっている別荘の方へ足を向けた。人氣の絶えた森閑としたガラン洞の別荘の中へ這入りこんで、階段を一步一步上って行く、歌声のする部屋はどこかと探して歩く。歌はどうもグノーの

セレナアドらしい、やがてその部屋がわかった。それは屋根裏のようになった小さな部屋で、入口の扉はすでに錆び腐れていたのだろう。その文学者の瘦腕でも開けることが出来た。這入ってみると縊死した姿のまんま白骨だけが部屋の中央まんなかにぶらさがっていた。部屋の壁に船室風の小窓が一つあいていて、その欠けた硝子ガラスの隙間から夜風が吹き込んでいた。グノーのセレナアドのように思つたのは自分の幻聴にすぎなかったのだと文学者は考えた。或は隙間洩る夜風のために摺れあつて鳴つた白骨のひびきであつたかも知れない。文学者はそう思いながら、ぶら下つた白骨に、ひどく哀れを感じて、じいっとこれを凝視したとき、すでにユルユルになりながらも脱け落ちずに左の薬指の骨にはまつている指環にふと気がついた。その指環から、この白骨の女が一度は自分と同棲したことがあつたがその後行衛不明になつてしまつた女だつたということがわかる——グノーのセレナアドはこの女が好んで歌つたものだったと今更のようにしみじみと憶い出す——『幽霊荘綺談』はまあ大体こんな風な筋で、いかにも黒木青蛾氏の病的な筆で、しかし、相当面白く読めるように書いてありましたよ」

「しかし——その話のどこまでがホントウなんだらう」
「さあ——無理心中の片割れが『幽閑荘』に暫くいた

ことは事実だと云われていますよ。しかし、幽閉されたまま白骨になったなんかは嘘で、やはり病死したとの噂の方が真相でしょう。しかし、不思議なことは、その後もしばしば、例のセレナードを聞いたと云うものが現われてきたんです。その歌声が、細々と、海岸を歩いてゆく人たちの耳に絡みつくように聞えてくるんだそうですが、——こいつは少しどうかと思えますね。幽閑莊を幽霊莊だなんて呼ぶようになったのは、やっぱり黒木青蛾が『幽霊莊綺談』なんて書き始めてからだと僕は信じていますよ。それ以来、いよいよ皆んながあの別莊を薄気味悪く思うようになったんですよ」

「誰か、その黒木青蛾なる人物を見たことがあるかね」
 「無いですよ、イヤ、無いとは断言出来ないけれど、どうもまだハッキリしないですね。いくら出不精の黒木青蛾だって、たまには町中へ出て来ることもあるだろうから、吾々だって見てるんだか知らないが、直接紹介されたわけじゃないから、あれが黒木青蛾だと云い切れるものがないんです——だから、ある或者は、青蛾は蝦蟇がまのように醜怪な男だと云うし、そうかと思うと、江戸前のキリツとした美男子で、いつもキチンと白足袋を履いてるなんて、もっともらしく云うものもあるんです」
 「じゃ——あたし、幽霊莊に行つて、黒木青蛾に会っ

てこようかしら」今まで黙って聴いていた丹間百合子は頰杖をついていた顔をピクリと起してこう云った。

「青蛾先生とやらを一口、簡易保険に加入せしめる——幽霊莊見学のついでに」

丹間百合子は、この局の女事務員の中では一番年下であった。今年女学校を卒業したての、したがってまだ局の事務に充分慣れてるとは云いかねるが、何をやらせても、向う気の強さと、少女らしい一筋の情熱とで、クルクルと立ち働いて、相当の成績を上げる伶俐な娘だった。

「丹間さんが、黒木青蛾のどこへかね——それは若干突飛すぎるしそれに殆んど無駄だね。いったいにああいう芸術家なんてものは、貯金だの、保険だのと云うものは、律義な平凡人のやることとして、へんに超然としてるのが多いからね。そんなことは、みんなケチくさくさくって小面倒な俗務だとしか考えていないんだよ。殊に黒木青蛾なんぞはそういう点では徹底してる方じゃないかな。それよりも丹間さん、その盲目のタイプピストみたいに監禁でもされたらどうする——」

「いいわよ、あたし、芸術家なんて、変人はいるかも知らないが、ホントの悪人なんていないと思うわ、——監禁されたって、あたし逃げ出してくるまでだわ、それに黒木青蛾一人を捉まえば、あたしの簡易保険勧誘率

は、村井さんを凌駕して、いよいよ局第一ということになるし——ハバカリながら真剣よ、物事は何んだって当って砕けるだわ」

「エライ——いい度胸だぞ。わしゃまけた」と云いながら、煙草を銜くわえたまんま、若い集配手が、ふらふらと仆れる真似をしてみんなを笑わせた。

2

「黒木青蛾は、いつも昼間は寝て、夜仕事するんだって云うから——青蛾に会おうとするなら、軒下の三寸さがるうしろと云う丑満頃だね」なんて云う人もあったが、丹間百合子は、昼間のカンカンの日盛りに出掛けていった。立秋後の海原は灰色がかって、どことなく荒涼として、いるけれど、陽ざしは相変らず強く、白っぽい砂坂道の照り返えしは百合子の頬つぺたをチリチリするほど焼きつけた。

砂坂道は崖の方へ続いて、やがて林の中に紛れ込み、それが杜切とぎれると、そのまま幽霊荘の庭先に出るのであった。

別荘そのものは、建ててからそれほど年代を経ていな

いのだけれど、いやに時代を喰ったような古びようであった。贅沢に自然石を積み上げて作ったこの洋風の建物には、古めかしく蔓薔薇などが絡みついていて、どこからともなく、甘い、物哀しい香が日溜りの中に匂い漂っているようであった。表面の石階を上りつめると、物々しい檜かの一枚板の扉ががしりと立ちふさがっていた。百合子は、自分がどこか西洋の物語にでもあるような、たとえば、僧院を訪れた尼僧のようにも思えるのだった。が、お河童頭おかわばあさまで、黄色いシヤサツカー地の簡単服の下からニヨキリといかにも跳ねかえりらしい脛の出ている自分の姿を思うと、クスッと笑いが込みあげてくるのだった。

勇敢にベルを押した。二度も三度も——しかし、森閑と静まり返った邸内から何の応答もなかった。ベルなんか壊れてしまったのかも知れない、そう思いながらも諦めかねて、もう一度とギユツと力をこめて押してみた。そうするとゴトリと扉の向うに物音がして、扉は重々しく軋みながら内側に引かれた。『ノートルダムの佻僂男たうおとこ』のような男が顔を出すかも知れないと思っていると、姿を現わしたのは、極めて平凡なお婆さんで、丁寧な物腰で来意を尋ねた。

「何か御用なら御伺いしておきますが——先生は今御

雪の夜の事件

一、殴られた紳士

ひとしきり降り続いていた雪がようやくやく止んだ。

院子（中庭）の楡の裸木からすべり落ちる雪の音が時折り聞えるばかりで、夜の更けてゆくのがしんしんと感じられた。

私は、北京の冬は初めであり、こんなに深々と降りつもった北京の夜の街筋が、なんとなく物珍しかった。

冬の夜の北京には、たとえば、アラビアンナイトにあるような何か面白い不思議なことが沢山充ちているような気がしてくるのであった。

殊に燈節の宵、中央公園に立ちならぶ氷燈の凄凉たる美しさは、どこやら怪談めいていて、私はその氷をくりぬいてつくった燈籠のなかに、青く透けて燃えたってい

る幻しのような焰の色を忘れることができなかつた。

私は、もう一度、中央公園に氷燈を見にゆくつもりで、家を出た。防寒帽をかぶり、長靴を履いて、ボカボカと降り溜った雪のなかを歩いて行つた。

ところが途中、東来順に寄つて、暖いものを腹のなかに入れると、すっきり、蕩然とした気持になり、氷燈のことなど、どうでもよくなつてしまつた。

そうこうするうちに、いい加減、夜も更けてしまつたので、私はそのまま、公寓へ帰えることにした。

私が、東来順を出て、王府井の通りを、独りで帰つてくるころは、もう殆んど人影もなくなつていた。

私は、とつぜん前方を見つめたまま立ちどまつた。

（オヤ、なんだらう）

喧嘩か？ 喧嘩かも知れないが、それは一風変つた喧嘩であつた。

なにしろ、前後のハッキリわからない活劇映画を、とつぜん、途中から見せつけられたようなもので、まるで、その事情がのみこめないのである。

車夫とお客の喧嘩である。

お客の方はあきらかに酔はらつていた。

やたらにステッキなどをふりあげて、車夫を威嚇している様子だ。つまり、どこそこまで乗せて行け、イヤ、

こんなおそくなってから、そんなに遠くまで行くのは御免だ——そんな風な云い争いらしかつたが、到頭車夫の方で折れたように見えた。お客は、意気揚々として車の人となつたが、静かに梶棒を上げた車夫は、お客がいい気持ちで、車上にフンぞりかえつてゐるのを、ちらツと横眼で見やりながら、走りだす構えをしたかと思うと、とつぜん梶棒を上向けて突つ放してしまつたから堪らない。車上の紳士は、フンぞりかえつたままの姿勢で、ドーンとばかり、街路の雪上に抛り出されてしまつたのである。よつぱらい紳士は雪まみれになりながら、猛け狂つて、この支那人車夫に喰つてかかつたが素面の車夫にはかなわなかつた。紳士の方は日本人だし、少し位の無理は没法子として、引き下るのが普通であるが、この支那人車夫は、よほど向つ気の強い奴とみえ、引き下るところか、逆にお客を撲り返した。

紳士は、ふらふらになり、またもや、雪の上におつ倒れた。

私は、あえて仲裁には入らなかつた。

堂々たる日本人のくせに、酔い痴れて、支那人車夫から殴りたおされる恰好は、とにかく醜態と云わざるを得ない。私は寂しい気がした。

それも、トコトンまで闘うなら、とにかくも、酒を喰

いすぎた紳士は、雪の上に崩れ伏したまま、二度と立ち上る気力もなくしているのだ。——というよりも、もうそのまま寝り込んでゐるのだ。

車夫は、そんな風になつてゐる相手を二三度小突き廻してしたが、とうとう張合けがしたと見え、車を引いて立ち去つてしまつた。

車夫の姿が見えなくなると同時ぐらいに、私は、雪の上に居汚く、倒されたまま寝り込んでゐる紳士を、えりがみを掴んで引立てた。

「おい——おやじ、シツかりしろよ。水ッ涕が、氷柱になつて鬚の下に下つてゐるじゃないか——いつたい、あなたの行先はどこなんだえ、何ッ、北総布胡同だ？」

相手は、見れば見るほど、恰幅も立派な、育ちのいい紳士らしいが、相当ひどく殴られたと見え、夜目にも著く、一杯に鼻血を噴きだして、可哀相でもあれば、齒がゆくもなるのだ。

私は、とりあえず、雪の上いちめんを散らばつてゐる紳士の帽子だの、懐中物だの、拾ひあつめて、それから、ヤッこらサと、紳士の大きな図体を抱えあげたとき、一台の洋車が、あきらかにこちらをを目ざして、走つてきたのである。

「おいッ——洋車！」

私は車夫に云った。

「この男の行先は、ハッキリわからないが、なんでも北、北、なんとか云ったぞ——」

「明白明白——北総布胡同×番地の権藤勇三さんです、このお客さんは」

車夫はそう云いながら、紳士を車に乗せると路上の雪を蹴散らして見る見るうちに、闇のなかへ遠ざかっていってしまった。

どこからともなくやって来た車夫が、至極心得顔に、よっぱらい紳士の住所氏名をスラスラと云い棄てて走り去ったことから考えれば、権藤勇三なる人物は、この界限の洋車曳きには相当顔が売れているのであろう、——私は、いろいろと、殴られた紳士権藤勇三を中心に、思いをめぐらしたのである。

前後の事情が、一向わかっていないけれど、どうやら非は日本人側にあるように見受けられた、——それだけにあの時、雪の上にも物も見事に叩き出された紳士の不様な姿が、かえって、なんとも情けない印象となつて鮮かに私の脳裡に染みついていたのである。

それにしても、これまでは日本人がステッキでも振りまわして一喝するともうそれだけで車曳きとの口論などは一方的に片づいてしまつていたのであるが、その夜の

支那人車夫が、いかにも大胆不敵で、腹が坐つていて、あつと云う間に、あれだけのことをやってのけ、しかる後、悠々と空車を曳いて立ち去つたのであるから、これまた、すこぶる鮮やかな印象を私の脳裡に刻み残したのである。

そのくせ、私は、あの車夫の背中に縫いつけられてあつたはずの登録番号を見定めるのを、すっかり忘れてしまつていたのである。

車夫の登録番号さえわかれば、北京の洋車が何万台あるうとも、あの男を探し出すは決して難かしいことではないのに——私は自分の迂闊さ加減にガツカリしてしまつた。

私としては、よっぱらつた紳士、権藤勇三氏の身許しらべよりは、むしろ相手の車夫に、ずっと魅力を感じていた。あの小憎らしいほど、骨っぽいところを見せた中国人の洋車曳きに、もう一度、なんとかして、めぐりあいたい、そういう思いが、まるで燈節の氷燈の焰のように私の胸のうちに妖しく燃えはじめた。

編者解題

浜田雄介

本書は、戦前から終戦直後にかけての渡辺啓助の探偵小説およびその周辺の作品を収録する。二〇一九年三月現在において比較的読むことの難しい作品の収録を優先し、啓助作品の選集である『聖悪魔』（一九九二年、国書刊行会）、『ネメクモア』（二〇〇一年、東京創元社）『渡辺啓助集 地獄横丁』（二〇〇二年、ちくま文庫）に収録された作品は除いた。また、戦時の国際冒険小説にも再評価されるべき力作は多いが、今回は省いた。つまり、従来代表作と目されてきた作品群は、およそ省かれていることになる。また、作品は論創社の黒田明氏の選に編者が加除した結果、およそ半分が黒田氏由来、半分が編者由来となった。すなわち必ずしも一つの視点からの選択ではない。このように記せば落穂拾いのように響くが、そこに積極的な意味がないわけではない。それを言うた

めに、渡辺啓助という作家の特異性に触れておく。

渡辺啓助は一九〇一（明治三四）年一月一〇日、秋田県仙北郡白岩村に出生したと、一般には知られている。逝去は二〇〇二（平成一四）年一月一九日なので、生を享けること一〇一年と九日。すでにして野上弥生子や丹羽文雄をしのぐ長寿だが、実はそれよりもさらに少し、長命であった。戸籍は右の通りだが、渡辺家には「明治三十二年十一月廿日午前九時誕生 渡邊圭介臍緒」という臍緒書が遺されており、これによれば渡辺啓助は、一八九九年から二〇〇二年まで、足かけ三世紀を生きた作家ということになる（拙稿「渡辺啓助追跡（一）」『新青年』趣味一四号、二〇一三年一〇月）。

戸籍への届けが遅れたのは父母の婚姻をめぐるいきさつによると思われるが、先妻の籍が残る難しい状況下に

において、臍緒書はせめてもの出生証明であったとも推測される。多難だったのは誕生までだけではない。生後間もなく移り住んだ函館近郊の谷好村で、幼時の啓助は大火傷を負う。父は北海道セメント株式会社に技師として勤め、母は近隣の小学校に奉職、子守りが目を離した隙に囲炉裏に落ちた啓助は、鉄瓶の熱湯をあびた。函館の病院に運ばれ一命はとりとめたものの、その顔にはケロイド状の痕が残り、長きにわたって煩悶のもととなる。

父の転職で住居は北海道から東京、茨城に移った。水戸中学では寄宿舎に馴染めず自宅から貨物列車で通学、文芸活動を始めるが、失踪、整形外科手術、休学、教会通いなどのすえ、青山学院高等学校に入京して上京する。卒業後は英語教師として群馬県立渋川中学校に赴任するも二年の勤務で退職し、九州帝国大学の開設間もない法文学部に進学。江戸川乱歩の名義でE・A・ポーの翻訳をし、映画俳優岡田時彦の作として『新青年』に「偽眼のマドンナ」を寄せたのが一九二九年のことであった。幼少期より弟の温とは行動を共にし、ポーの翻訳も『新青年』デビューも、先行して作家となり、編集者となった温の紹介であったが、その温は翌三〇年に交通事故で没する。

顔に聖痕を持ち、共同体を転々とし、ゴーストライタ

ーとしてデビューしたかと思えば親しい者の突然の死。生まれた時から世界の外側に立たされたかのような経歴である。そのようにして作家となった人間にあって、一世紀を超える長寿とは、たまたま健康で長生きしたなどというものではあり得ない。そんな説明を許すほどに、私たちの好奇心は飼い慣らされてはいまい。歴史や詩に惹かれつつミステリーという表現形式を選んだ渡辺啓助が、そのミステリーにこだわりつつ怪奇な作風から冒険小説へ、また明朗あるいはエロティックな通俗作品やSFもこなし、探偵作家クラブの会長として法人化を果たし、やがて絵画の世界に赴いたことを、現在の私たちは知っている。この作家にとって、百年を生きたとはどのようなことだったのだろうか。彼が生きた百年とは、どのような時代であったのだろうか。

もとより、作家本人が最初から百年の生を想定していたわけではあるまいし、作家自身と同じようにその百年を見ることはできないだろう。けれども後世の人間たる私たちには、やや無責任に、時代を俯瞰することも許されているはずだ。そのように考えると、怪奇性や芸術性、あるいはトリックや論理性といった特定の評価軸からは漏れるような作品にこそ、むしろ雑多な痕跡が残されて

〔著者〕 渡辺啓助 (わたなべ・けいすけ)

1901年、秋田県生まれ。本名・圭介(けいすけ)。九州帝国大学法文学部史学科在学中の29年、実弟の温とともに江戸川乱歩名義でE・A・ポーの短編を翻訳し、映画俳優のゴーストライターとして「偽眼(いれめ)のマドンナ」を執筆する。卒業後は教員を務めながら創作活動を行い、37年より専業作家となった。42年、陸軍報道部の従軍記者として大陸に派遣され、その時の体験を基にした小説「オルドスの鷹」などが三期続けて直木賞候補に挙げられた。戦後は作家グループのまとめ役として日本探偵作家クラブ(現・日本推理作家協会)会長を務め、SF同人グループ〈おめがクラブ〉の創立にも尽力。書画や詩作なども積極的に手掛けており、80年には文芸サークル「鴉の会」を立ち上げた。2002年逝去。

〔編者〕 浜田雄介 (はまだ・ゆうすけ)

1959年、愛知県生まれ。成蹊大学文学部教授。専門は近代日本文学。『新青年』研究会会員。編著に『江戸川乱歩作品集』(岩波文庫)、共著に『昭和文化的ダイナミクス』(ミネルヴァ書房)、『怪異を魅せる』(青弓社)など。

〔巻末エッセイ〕 渡辺 東 (わたなべ・あずま)

渡辺啓助の四女。単行本の装画や雑誌の挿絵など画家として活躍し、画廊「ギャラリー・オキュルス」のオーナーも務める。

わたなべけいすけたんていしよせつせん

渡辺啓助探偵小説選 I

〔論創ミステリ叢書 119〕

2019年5月20日 初版第1刷印刷

2019年5月30日 初版第1刷発行

著者 渡辺啓助

編者 浜田雄介

装訂 栗原裕孝

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

<http://www.ronso.co.jp/>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

©2019 Keisuke Watanabe, Printed in Japan

ISBN978-4-8460-1805-4